

---

# エクスタシー

中井千晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エクスタシー

### 【Nコード】

N1503A

### 【作者名】

中井千晶

### 【あらすじ】

エクスタシーという麻薬…それにはまっていく人間達をリアルにかいた小説

## 神様との出会い

ある人は、快樂を求めて人格を壊した。

それは二年前の冬の出来事。

優介という青年にであつた。

私は遊び友達の由美と街をふらふらしていた。

金のない私たちは、暇な時はこうやって二人で歩き回る。

『ねえ！その女の子！暇なら遊ぼうよ！』由美は私についていか行かないかの合図をした。

由美はついていく合図だった。

私もついていきたかったので、首を縦にふった。

四人でふらふらとマチを歩きながらたわいもない会話で盛り上がっていた。

ナンパ男の二人は、まるで昔からの友達のように話やすかった若い二人組の男が声をかけてきた。

私は由美と顔をみあわせて、いつもの様についていくかついていかないかの合図をした。

私も由美もついていく合図だった。

今日初めて会ったというのにそのナンパ男達は昔からの友達のように話しやすく楽しかった。

そして四人でたわいもない会話で盛り上がっていた時ナンパ男の片方が由美をつれて消えて行つた。

取り残された私ともう一人のナンパ男は由美達の事なんかきにせず

に、二人で話をしていた。

すると突然、男は、財布の中から小さなビニールのパックをとりだした。

その中には、ピンク色と、淡い緑の錠剤がふたつづつ入っていた。それがエクスタシー（人間崩壊…四時間の快樂）との出会いであつた。

男は、回りをきしながらその錠剤のピンク色の方を一粒のんだ。

男はニヤツとして私の唇を人指し指でなでながら無意識のうちに開いた口の中にそっと、もう一つのピンクの錠剤を含ませた。

少し苦い味が口の中に広まった。

私は何も抵抗しなかった。

男は言った。

『エクってゆーの！俺たちの中ではこれの事神様ってよんでるよ！君もエク好きなんだねえ』私はこのピンクの錠剤がエクスタシーという事を初めて知った。デモ、なんらかのヤバイ薬であることはきずいていた。それからすぐに男の家に行った。男はソファーにこしかけて、『もうそろそろかな』と言ってニヤツと気持ち悪い笑みを浮かべた。その瞬間私はゾクッとして、体に少し力をいれた。『エクスは、飲んでから40分ぐらいしないときまんないんだよ』シャブは、すぐにきまるけどね』デモ俺はシャブよりエクスが好き！』私はエクスタシーの話を長々と聞いていた。五分後、私の体にも異変が現れた。顎がガクガク震え始め、心臓がドクンドクンと脈うった。もう体全部が心臓になったように…視点はあわない…部屋にある家具やらなにやらがブルブル震えて見えた。すると、男は急に私に近づいて耳元で優しく囁いた『この薬をのむとね、セックスがめちゃ楽しいよ』私は無意識のうちに服を自分から脱ぎ始めた。下着だけになった私を男は舐め回すかのゆうに見つめた。たまらなくなった男は、私のブラを片手で手慣れた手つきではずすと乳房をまるでオッパイをほしがる子供の様にすいあげ、自分もベルトをはずし、硬直した自らを私の顔にちかずけた。私はそれを口で愛撫した。して男は私の足を強引に開かせ、私の股に顔を埋めた。『あっ！…ああんっ！…んん…』私の幸せに満ちたあえぎ声が部屋にヒビイタ。もうびちよびちよになった私の中に男は入り込んだ 私の中で

## 墓場

目が覚めると私は一人でベットに寝ていた。  
男の姿はなかった。

ふと辺りを見回すと、テーブルの上にかみきれがあった。携帯番号  
がかかれていますの下の、

「またほしくなったらかけて」  
と書いてあった。

私はメモを半分におり、バックにいれた。  
体がすごくダルイ…喉が以上なほどかわく。

私は急ぎ足で男の家をでた。

五分後、由美から電話がかかってきた。

「昨日どうだったあ？あの薬まぢすくくない？！」由美は興奮し  
て言った。「エク？気持ちよかった！てか由美今ドコにいるの？」  
私は由美の異常なまでの興奮にとまどいながら話をそらした。「

通りの近くの アパートの二階の一番左の部屋にいるよ！今か  
らきて！」私はなにげなく「うん！」と言い重たい足取りで由美の  
いる場所へ向かった。十分後、由美がいるアパートにつきいた。な  
んのためらいもなく由美がいるだろう部屋のドアを開け入った。「  
由美ー！！！」私は由美の名をよびながら、警戒しつつ部屋の奥へ  
と入っていった。すると後ろからイキナリ手首をすごい力でひっぱ  
られた。私はびっくりして声もでなかった。我にかえりとつさに後  
ろを振り返ると由美がニヤツと笑いながら私の手首を掴んでいた。  
「もう！イキナリ何すんだよ！」私はキレた口調で由美に言った。

すると由美は突然泣き崩れ、ごめんなさい！ごめんなさい！と叫び  
だした。私はいつもとは明らかに違う由美の様子に恐怖を抱いた。  
すると奥の部屋から背の高い女が現れた。女は私をみてニコつと笑  
いかけた。「初めまして！あんた名前は？」女は気さくに私に話  
かけた。私はなにも言えずに下をうつつ向いた。「いいよ！名前なん

てゝゴメンゴメン！ここにゐる奴らはみんなお互いの名前知らないから』意味不明な事を言う女を私はじっとみつめていた。『まっ！とりあえずはいんなよ』女は一番奥のドアをあけ手招きして、私を満面の笑みで招きいれた。私は部屋の中に足をふみいれた瞬間、息を飲んだ。

墓場だ…

## 優介との出会い

目の前には全裸でブルブルと震える女が倒れていた。  
女の腕には小さな赤いアザがいくつもあった。

「シャブだ……」

私は心の中で呟いた。

女は虫の鳴くような声でブツブツと何か言っていた。

そしてその女のすぐ隣には顔色の悪い男が二人ぐったりと横になっていた。

骨と皮しかないくらい痩せ細り、全く生気を感じられない。

人間じゃない……誰がみてもヤク中だって解る……私は怖くなった……シヤブやらなんやらの薬物の存在は知っていたのだが、人間をここまでするなんて想像もつかなかった。

そしてその男達と同じような女と男が奥の寝室で絡み合っているのが少し見えた。

私とその光景を無心に眺めていると、誰かが部屋に入ってきた。

『今日も売れた売れた』長身の金髪の少し眺めの髪の方がそう言いながら疲れた表情で私の隣にドカッと座った。私は呆然と立ち尽くしたまま男を見下ろした。すると男は私の視線にきずき私を見上げた。『初めて見る子だね！かわいいね、俺、優介！よろしく』その男は笑顔で私に話かけてくれた。私もその男の優しい笑みにつられ無意識のうちにニコッと笑顔をかえした。『君もほしくて来たの？』男は私に優しく呟いた。私はなんの事かわからず困った顔をして見つめた。『昨日エクス喰ったろ？』『うん……』『だろ？バツチリきまった？』私は小さく頷いた。すると男はポケットからアルミ製の掌ぐらいの入れ物を取り出した。『見てみるよ』私は中をみた。中身は全部エクスタシーだった。ざっと二百錠はある。『俺売人なんだ』そういうと私は男に手を引かれ部屋をでていった。私はなんの抵抗もせず、男についていった。もう由美の事なんか頭になかつ

た。そして細い裏道を二十分ぐらい歩いただろうか：小さな古いアパートについた。男はアパートのドアを開け、私を招き入れた。どうやら男の家らしい。そして男はキッチンにむかいなにやら料理をしはじめた。私はだまってみている。『俺の手料理食えるなんてお前ラッキーだなあ』男は楽しそうに言った。『何つくんの？』私はニコニコしながら男に近寄った。『できた！激うまホットケーキ』私は思わず、大爆笑した。見た目によらず案外こいつカワイイかも！そして男の作ったホットケーキを二人で食べた。

優介：これが貴方との出会いでした。



## しのびよる影

その夜私は優介に抱かれた。

優介の背中には大きな女神が描かれていた。

その女神は俺にとってエクスタシーの“象徴”と優介は冷えた目つきで言っていた。

朝を迎え私は優介の無邪気な寝顔を後にしアパートを去った。

私は家に帰り由美の携帯に電話した。

何度かけてもつながらない。

由美は一体どこで何をしているのか少し心配したが、あの“墓場”には行く勇気はなかった。

由美の事だからそのうち連絡をよこすだろう…そう考える事で不安はなくなっていた。

私はベットの上で横になりながら優介の事を考えた。

あの刺青…エクスタシー…私の頭の中は次第にエクスタシーの事でいっぱいになっていた。

『あの快感をもう一度味わいたい…』私の鼓動は高鳴った。明日、あのナンパ男に電話してみよう。私はどんどんエクの虜になっていた。依存という二文字がどんなに怖い事なのか知らずに…直径約一センチ。私のからだに神様が溶けこむ時をただひたすら待つ。エクスタシーは神様。私は鏡に映った自分を見つめた。

妙に血色が悪い。

掌には青白く血管がうきでて、ドクン…ドクン…と脈うつてる。

私はいつもとは違う体の変化にうすうす気づいていた。

だけど自分の体が壊れるという恐怖より、エクスタシーがしたい！という欲の方がはるかにおおきく、恐怖はおし殺された。

優介の背中の怖いほど美しい女神がエクスタシーならば私はその女神を手に入りたい。

本当の快楽、極楽浄土、神様はエクスタシー。

私は洗脳されていく……でも、あの時気づいていれば、自分の自省心  
があればまにあったのかもしれない。

私は急にひどい疲労に襲われ、そのまま眠りについた。

## 由美のみたもの

由美はあの“墓場”にいた。

由美はエクにすっかりはまり、快感を得るために何人もの男と交じりあっていた。

由美の顔つきはすっかりかわり、生気は失われていた。

そんな由美に想いをよせる男性…あの由美を連れていったナンパ男の礼二は由美を愛してしまっていた。

由美もやがて礼二の想いに気づき、次第に由美の気持ちは礼二に傾いていった。

『ずっと一緒にいよう』礼二はあの冷えきった墓場で由美にそっと呟いた。由美は目に涙を浮かべ、力なく首を縦にふった。エクスタシーに依存しきった男女は激しく愛し合った。

「このまま時間がとまればいいのに…礼二と一生一緒にいたい…」

由美は礼二にはまっていた…そして次第にエクスタシーに対する依存は薄れていった。

由美は気づいた。

このままエクスタシーを続けても自分の体を壊すだけ…少しでも長い時間、礼二と一緒にいたい…将来、礼二と一緒になれたなら礼二の子供を産みたいから…幸せな家庭を築きたいから…

「あたしはエクをやめるわ」

由美の決断は固かった。

しかし、礼二は違った。

由美はエクスタシーを続けた期間が短かったのと、彼女の強い意志があったからよかったものの、礼二はもうエクスタシーに依存しきっていた。

もう誰にもとめられなかった。

彼の理性は失われ、ただエクスタシーを体にとりこんだ…由美は何

度も何度も礼二の手からエクを奪い礼二をエクから助けだそうとした。

由美は見捨てなかった。

最後まで…『礼二…愛してる。』

あんたとはずっと一緒にいたいよ。』そう言うと由美は礼二の手をひき外へでた。

『一緒にいれる場所はもうここしかないんだね…礼二愛してる…ずっと一緒にいつまでも離れない』

由美は礼二の手を固く握った。

カンカンカンカン…

踏み切りはゆっくりおりた…

眩しい光が二人を包んだ。

由美は眩しさに目を細め笑顔で礼二を見つめた。

『ニュースをお伝えします。』

昨晚未明、二人の男女が線路に飛び出し死亡しました。警察はこれを心中とみています。』

由美は一体何をみたんだろう。

エクスタシーに依存した礼二を助けられなかった由美…礼二を愛した由美…礼二と供に今でも由美は生きています。

## 無くしたもの

私は由美の死を由美の死んだ翌朝、友達から耳にした。：

『由美が死んだ』

私は放心状態になった。

なんで…由美が？そんなわけない！これは夢！つい数日前までバカして遊んでたのに…私は夢だ夢だと自分に言いきかせた。でもこれは現実だと由美の葬儀で確信した。

私は友達に支えられながら由美の葬儀に参列した。

奥の方に由美の母親が見えた。

由美の母は私と目があうと、ふらついた足どりで私に近よってきた。  
「…由美、男の人と心中したのよ…由美、彼氏とかいたのね…由美、なんで逝っちゃったの？お母さんをおいて…ねえ、由美は何か悩みとかあったの！？おばちゃん、由美の死んだ理由がわからないの！」  
由美のお母さんは溢れでる涙を拭いながら私に助けを求めるかのように泣きついた。

私は何も答えずにただ号泣した。

すると、由美の母の狂った泣き声に気づいた由美の父が慌てて走りより由美の母を支えながらまた奥へと消えて行った。

由美の母の悲痛な叫び声はいつまでもやまなかった。

由美の遺影を見つめた。

写真の中で笑っている由美は子供の様に無邪気だった…私の中で何かがプツンと切れた。

「ゆみいいいい！！！！！！ああああ！！なんでだよ！？なんでだよ！？…何があつたんだよ…」

私は泣き叫んだ、まわりの友達は私をおさえつけた。

私は狂ったように泣き続けた。その後の記憶はない。

私は、夢を見た。

由美がいた。

いつもあいつは一緒にいた。

私は由美の泣き顔も笑った顔も全部知ってる。

辛い事も悲しい事も由美がいたから乗り越えた。

大事な大事な友達は今も話す事もできなくなった。

冷たくなった私の宝物（由美）は、もう目をあけてくれない。

夢のなかの由美はいつもの様に私の手をひき、街を歩く… ガラスケースにならんだアクセサリーと一緒に見たね。

そして、ペアのネックレスをお互いプレゼントしあった。

私の胸元には今も小さく光っている。

喧嘩もいっぱいしたよね… でも朝になれば忘れてすぐになかなおりした。

でも… 由美はもう思い出や夢でしかあえなくなった… なんで由美は死んだをだろう…

『男と心中した』

男？… 由美には彼氏はいなかったし、それ以前に好きな男すらいなかった。その事は私が一番よく知っている。

じゃあ、男って一体誰なんだろう… 由美は何があっただろう… 自殺するぐらい悩んでたのに、なぜ私に連絡もよこさなかったんだろう？ 私… 何もしらなかった… 由美は私を頼らなかった。

頼れなかった？… わからない… 由美はもうなんにめ話してくれない。

## 繰り返す

由美が死んで一週間がたった。

私は水分以外のものは何もとらず、部屋にひきこもっていた。頭の中は由美の事でいっぱいだった。

当然のようにいつも一緒にいた由美…昔からずっと一緒だったのに…鏡に写った私の顔はひどくやつれていた。涙はもうでもこなかった。

「きついよ…由美…」

部屋にはつてある二人で写った写真を見つめてはそう呟いた。ベットによこたわると携帯がうるさくなった。

由美が死んで以来、友達やら知人やらのメールがたえない。内容は全部、由美の事…

「大丈夫だよ！由美は遠い所から見守つてくれるから…早く元気だして！」

「由美の事なんだけど…何かあったら私に言つて？」

「ねえ！きばらしに遊び行こう！」

「ちゃんとご飯食べてる？！最近みかけないけど…大丈夫？」

みんなが心配してくれてたつて事は今になってありがたい。

だけどその時の私はそんな友人たちの励ましはひどくうざかった。返事なんて誰にもしなかった。

そんなとき携帯の着信がなった。静かな部屋に着信音が響いた。

優介…

優介から電話がかかってきた。私は思いだしたかのように電話にでた。

「もしもし…」

「あ…！優介だけど、元気してる？」

「うん…」

「由美と一緒に死んだ男、あの時由美がついていったナンパ男だよ」

「え？…本当に！？な、なんで！？」

「死ぬほど惚れあつてたんじゃない！知らない！」

「おしえて！由美が…なんで！？…なんでよ…由美に何があつたの…」

「だから知らないて」

「……」

「今夜あわない？」

優介の誘いは沈黙を破った。私はふいに

「うん…」

と返事をした。

優介の声は私の空っぽになつた心になにか鋭くささるようだった。正直、優介とはあいたくなかつた…でも、優介には何か断る事ができなかつた。

私はその夜、優介の指定したファミレスで優介をまっていた。

一時間くらいまっただろうか、優介は呑気な顔で急ぐ様子もなく私に近よつてきた。

「久しぶり…ずいぶん顔色悪いな！大丈夫や？」

私は力なく頷いた。

それから二人で優介のアパートに行った。

部屋に入るなり優介は私をベットに押し倒した。

私は抵抗せず、ただ優介のなすがままになった。

優介は乱暴に私のスカートに手をいれ、下着の中をまさぐった。

優介の荒い吐息が私の鼓動を高鳴らせた。

久しぶりに体中に熱が走った。だけど…私は無表情に優介の行為をみつめた。



## 優介の傷

優介は私の股を乱暴に開かせ、あらわになった私自身をみつめた。すると優介は立ち上がり、部屋の片隅にある小さな引き出しから何かをとりだした。そして私の方に向き直り、拳を開いた。

「エケだ」

私は興味なさそうに呟いた。

「飲め」

私は無心のままに優介からさしだされた小さなピンクの錠剤を呑んだ。優介もそれを呑んだ。

「お前、何で電話くれなかったんだよ」

「なんとなく」

私のそっけない返事に優介はむすつとした。

「俺、お前は客にはしない」

「は？」

「俺、売人なんだけど、あのナンパ男みたいに街で適当な女ひっかけて、エケ吞ませて、味覚えさせて客にすんだよ！だけどなんかお前は客にはしたくねーんだよね！」

優介はかまわず話を進めた。

「俺もお前みたいに大事な人を失った事がある。…俺には家族が誰一人いねーんだ、俺が中学ん時、親も兄弟も死んだ…」

胸を刺されたように痛かった。

心がえぐりとられるようだった…優介の深い悲しみは自然に私に伝わった。

私の頬に涙が伝った。

そして優介をひきよせ抱き締めた。

優介は小さく震えていた。私は力一杯優介を抱き締めた…

沈黙が流れた…

「きいてきた。」

私は優介に呟いた。

優介はニヤツと笑い頷いた。

その瞬間、悲しみの沈黙は破られ、快楽の扉が開け放たれた。心臓ははきだしそうなくらいに高鳴って、視点はあわず、ブルブルと震えた。

二人の男女の息は荒くなり、静かな部屋に響いた。

喉の乾きはたえずいつまでも水分をとり続けた。

今までの悲しみが嘘だったかのように私は笑顔で優介に抱きついた。

優介の胸の中は母のような安心感があった。

「優介といるとなんか落ちつく！」

優介は私の頭を撫で、ぎゅっと抱き締めた。

そして熱いディープキスを交した。

私の吐息はもうヤバイくらい荒い！二人の男女は衣服を脱いだ。

そして二つの裸体は激しく絡みあった。

もう理性もクソもない。お互い激しく求めあった。

エクスタシーと私と優介！優介に抱かれて、私は何度も何度も絶頂を迎えた。

揺れ動く視点は必死に優介を捕えていた。

優介は泣いていた！なぜ涙を流しているのかは気にならなかった。

やがて、優介は私の中で果てた。

白い液体が私の太股を伝った。

だんだんとエクがきれていくのがわかった。

水を大量に飲み、優介と寝そべった。優介は私の髪を優しく撫でながらこう囁いた。

「愛してる」

その夜は優介の腕枕で眠りについた。窓から見える夜空は何か切なかった。

## 墮落

朝が来て夜になり、夜が明けて朝が来る…それが何度も何度も繰り返していった。

優介の部屋の窓から見える日の出と夜空。

繰り返していく日々の中には私と優介と『エクスタシー』が在った。あの錠剤を何度口にしたらだろうか、意識はもうろつとして、食事は一切とらない日々。

自分がわからなくなる

人が怖くなる

肉体が壊れる

幻覚、幻聴に脅える

理性がなくなる

死にたくなる

エクスタシーの効果が失われると、そんな恐怖感に襲われた。その恐怖から解放されるために、またエクスタシーを求めた。

いつのまにかエクスタシーは生活の一部になっていた。

しかし、エクスタシーは無限にあるはずもない、エクスタシーはそこをつきた。

「ない…ないないないない！ない！！！！何だよ！！」

優介はもう気が狂っていた。

部屋の中を探しまわり、棚から何から必死に探す。

部屋は廃墟みたいな有り様になった。

そんな優介をみて怖くなった私は、両手で耳をふさいだ。

優介の悲鳴は力一杯耳をふさいでも聞えた。ふと、夕陽のさしこむ窓に目をやった。

「ああ…！！」

窓ガラスに写る私の姿はひどかった。

ガリガリに痩せこけた肩、頬骨が目立ち、目がグリッと浮き出てい

る。

窓ガラスに写る自分と見つめあい、私の震えはもうバイくらいになっただけだ。

「私なの？…」

あまりにも醜い自分の姿…これが現実。これがエクスタシー。

カーテンを閉めた。現実から逃げた。

何時間も部屋中荒しまわる優介に目をやった。

私も一緒に部屋を探した。

あるはずもないのに、どこにあるという『錯覚』…探した探した探した…エクスタシーを…そして朝を迎えた。

私は台所で寝ていた。まだ優介は探していた。

「エウ、探さなきゃ」

そう思い起き上がった瞬間…ひどい立ちくらみに襲われ、私は近くにあった食器棚にもたれた、そして食器棚と一緒に倒れた。

「ガシャーン！！！！」

凄惨な音が部屋に響いた。そして、優介は急いで私のもとへ来た。

「ど、どうした？！大丈夫か？！お、おい！」

優介の声は微かに聞えていた。そしてだんだんと記憶は薄れていった。

## 失いたくないから

目を覚ましたのは二日後の朝だった。優介は心配そうに私の顔を伺った。

「本当焦ったよ。エクはなくなるしお前は倒れるし。」

優介はそう言うのを私をぎゅっと抱き寄せた。

私の胸は苦しくなった。

お互い血色が悪い…エクのせい。

私は怖くなった。

エクがしたくてしたくてたまらない自分に恐怖を抱いた。

エクスタシーは確実に自分の体を壊しているのに、症状は目に見えるのに、こりず私の脳はエクスタシーを求める。

しかし、まだ私は自分自身を失ってはいなかった。

エクスタシーを求めるために行動しない。

優介は一人、街へ出て行った。

快楽を求めるために…優介の背中には鮮やかな女神の刺青…痩せほそった体にその画はふつりあいだった。

ドアの閉まる音とともに私は正気に戻った。

そして確信した。

優介を愛してる！助けなきゃ…由美はエクスタシーに奪われた…優介まで奪われたくない…もうこれ以上大事な人を失いたくない。

そう決意した。

心の底から決意した。

優介を止めたいのに、追いかけたいのに、立ち上がろうとしても足が弱って無理だった。

泣きじゃくり、ただ優介…優介！と愛する人の名を呼んだ。

ようやく立ち上がった私はヨロヨロと外へ出た。

優介を無我夢中で探した。

街には人が溢れていた。

空はやがて黒く染まり夜になった。  
どこを探してもみあたらなかった。

優介のいつも行っていた場所は全部探した。

あの『墓場』にだって行つた……もう私はただひたすら優介を探すだけだった。

夜の街を走った。

愛する人を失いたくないから。

でもいくら探しても優介はいなかった。

それでも諦めず探し続けた。

そんな思いで優介を必死に探している最中だった。

私の下腹部に締め付けられる様な激痛がはしった。

私はあまりの痛さにその場に座りこんだ。

キリキリと歯をくいしばり痛みに耐えた。

激痛は止む事なくさらにましていった。

かすむ視界には眩しい夜空が広がっていた。

優介も同じ景色を見ている。

同じ空の下にいますか？ と思ったら優介を必ず探しだせるとそう思えた。

私は痛みを押し殺し、優介をまた探しだした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1503a/>

---

エクスタシー

2010年10月9日20時11分発行